

鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>

特集

「海外武者修行」で

若手研究者を育成

「熱帯域における生物資源の多様性保全のための
国際教育プログラムの成果」

鹿大「知」の探検

国内外でデートDV予防教育の研究を展開

医学部保健学科 下敷領須美子准教授

寄附講座「地域医療支援システム学講座」設置

日置警察署交通課長 米倉隼人康さん

五藤雅人さん(医学部医学科6年)

農学部附属動物病院 軽種馬診療センター

大崎町長 東靖弘氏

吹奏楽指導者のためのワークショップ in 鹿児島大学を開催 ほか

「奄美の恵み」海洋療法を活用した健康増進」

歯学部総合研究科 嶽崎 俊郎教授

かごしま探訪

なんでも情報版「みみずく」

輝く 鹿大生

鹿大見てある紀

鹿大への提言

鹿大の新たな試み

アラムナイ追跡隊

平成19年度から始まった若手研究者育成の取り組み「熱帯域における生物資源の多様性保全のための国際教育プログラム」が、平成24年に最終年度を迎える。若手研究者の海外での研究生活、鹿大と海外パートナー機関との連携の深まりを通して、5年間の成果に迫る。

特集

「海外武者修行」で若手研究者を育成

熱帯域における生物資源の多様性保全のための国際教育プログラムの成果

大学院生をはじめとする若手研究者に「海外武者修行」の場を提供する「熱帯域における生物資源の多様性保全のための国際教育プログラム」が、平成24年に最終年度を迎える。世界一の生物多様性を持つとされるスマトラ島をはじめとする東南アジアの研究機関で研究に専念できる機会を提供するこのプログラムは、独立行政法人日本学術振興会（以下、JSPS）が募集した「若手研究者インターナショナル・トレーニングプログラム」（以下、ITP）に平成19年に採択された。平成24年までの5年間にJSPSから約8千万円の支援を受け、派遣される大学院生の旅費滞在費は原則無料。鹿児島大学大学院の理工学研究科、農学研究科、水産学研究科、連合農学研究科のいずれかに在籍する大学院生や助教、ポスドクを対象に、急速に減少しつつある熱帯生物資源の保全に貢献できる人材の育成を最終目標に派遣を行ってきた。鹿大のITPの特徴と、派遣された大学院生の海外での研究生活を通して見えてくる、ITPの成果と今後の展望を紹介する。

* ポスドク

Post-Doctoral Fellow の略。博士号を持つ、主に大学等の研究機関における任期付きの研究員職などを指す。

熱帯域の生物学において 鹿大が積み上げた成果を基礎に

I T Pは、日本の若手研究者が海外で活躍研鑽する機会の充実・強化を目的に、平成19年からJ S P Sが始めた支援制度である。鹿大は理学部や農学部、水産学部が中心となり、熱帯域における生物学などの分野で長年にわたる研究成果を積み上げてきた歴史がある。現地の研究機関と共同研究を行う教員も多い。こうした実績を基に、鹿大は「熱帯域における生物資源の多様性保全のための国際教育プログラム」を練り上げ、I T Pに採択された。

鹿大とつながりの深い 海外パートナー機関との連携

若手研究者の受け入れ先となる海外パートナー機関は、I T P開始当初、インドネシア科学院生物学研究センター(L I P I)とアンタラス大学(共にインドネシア)、サバ大学とトレンガヌ大学(共にマレーシア)の計4カ所だった。いずれも多種多様な動植物が息づく地域に充実した研究施設を持ち、鹿大とのつながりの深い研究機関であ



る。現在では、ボゴール農科大学とバンドン工科大学(共にインドネシア)、カセサート大学とスラナリ工科大学(共にタイ)が新たに加わり、海外パートナー機関は計8カ所となった。派遣された大学院生はこうした拠点を利用し、海外パートナー機関のスタッフのアドバイスを受けながら、身近にある豊かな自然をフィールドに2カ月間の研究に専念する。



派遣期間は研究に専念 英語での成果発表も

派遣前には現地での生活態度やマナー、英語での論文作成・口頭発表について鹿大のI T P担当教員から指導を受ける。現地へ行ってからは大半の時間を日本人の指導教員なしで研究に費やし、派遣期間の最後には研究成果を英語で発表する。派遣期間中に体調を崩したり、思



うような研究ができないといった苦労をしながらも、自分で計画し、考え、工夫しながら何とか派遣期間を乗り切った若手研究者には自信がみなぎり、人間的にもたくましく成長する。思い通りにならない状況の中で、いかに工夫して成果を出すか。これこそ、研究者になくてはならない資質であり、I T Pはその資質を養うことができるプログラムであるといえる。

海外パートナー 機関と連携した 「海外武者修行」 プログラム



海外パートナー機関の一つ、LIPI



LIPIの研究室で実験をする大学院生



植物園での調査の様子





鹿児島大学廃液処理室 特任助教
河野 百合子さん Yuriko KONO

研究テーマ:インドネシアジャワ島西部の小規模金採掘地域におけるシマオオタニワタリを用いた大気中水銀のバイオモニタリング
派遣先:インドネシア科学院
生物学研究センター(LIPI)

植

物と水銀の関わりや水銀の物質循環を調べ、化学物質が生態系にどのような影響を与えているかを評価する「バイオモニタリング」の手法の開発をめざし、研究していた河野さん。I T P参加当時は理工学研究科生命物質システム専攻の大学院生だった。平成19年度、平成21年度に3回のI T Pに参加し、計約5カ月間インドネシアで研究を行った。

初回の派遣の際、国際協力機構(JICA)の職員から金の精練に水銀を利用している国立公園内の違法採掘集落について話を聞いた。河野さんは植物や大気中の水銀濃度を測定し、水銀の拡散の範囲や度合いを研究しようと計画を立て、採集した着生シダ植物を同定し、大気中の水銀濃度を測るといふ地道な調査を続けた。金採掘集落の家庭

にホームステイし、2泊3日の調査も経験。集落の人々と同じものを食べ、生活を共にした。現地の村に入るとインドネシア語しか通じない。初めは自分の考えをうまく伝えられず、もどかしい思いもしたが、派遣の回数を重ねるごとに自分の希望を伝えることができるようになったという。

I T Pへの参加で得たものは?との問いに河野さんはこう答えてくれた。「学部時代から取り組んでいた水銀の研究を続けられたことでしょうか。今日の日本では水銀汚染は過去のことと思えますが、インドネシアに行くと、今まさに汚染が進む地域が目の前にある。I T Pで水銀汚染の現場を目の当たりにしたからこそ、覚悟して研究をしなければならぬという気持ちを持てたと思います」



- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- ⑨



- ① 国立公園での調査にあたり、必要書類に記載
- ② サンプル洗浄中の河野さんとLIPIのスタッフ
- ③ シマオオタニワタリを採集
- ④ LIPIの植物標本室でサンプルの同定を行う
- ⑤ 大気中の水銀のデータを取る
- ⑥ 精練小屋の隣りにある魚の養殖池。池は生活排水や水銀で汚染されている
- ⑦ アマルガム(水銀と金の合金)中の水銀だけを高温で揮発させ、金を取り出す
- ⑧ バタンで行われたワークショップでは英語で発表
- ⑨ 野外調査に同行してくれたLIPI研究者のヌリルさんと

[指導教員からひとこと] 理工学研究科 富安 卓滋 教授

通常なら入ることのできない採掘場に入り、そこで住民と交流を持ちながら調査ができたことは大変貴重な体験です。場所によって採掘の方法が違い、水銀濃度も変わってくるので、今回彼女が取ってきたデータの重要性は高いと考えています。それを整理し、わかりやすく報告するのが研究者の使命。次のステップに進むことを期待しています。

たれさ遣派
者研究手若
の 声



鹿児島大学大学院理工学研究科
地球環境科学専攻博士課程1年

工藤 芳文さん Yoshifumi KUDO

研究テーマ:

西ジャワにおける移入植物の分布調査

派遣先:インドネシア科学院

生物学研究センター(LIPI)

小 学生の頃のゲーム旅行をきっかけに、熱帯地域の生物多様性に興味を持ち続けてきた工藤さん。東邦大学理学部生物学科を卒業後、熱帯雨林の生物多様性についてさらに研究を進めたいと鹿大大学院理工学研究科に入学した。ITPへの参加は平成21年度〜23年度の計3回。それぞれ2カ月ほどインドネシアに滞在した。

工藤さんは、熱帯雨林の生物多様性がなぜ、どのように維持されているかについて研究をしている。ITPではグヌンハリムンサラク国立公園とグヌンゲデ・パンゲランゴ国立公園内の計6カ所の調査区域で31種の移入植物を調査対象に研究を進めた。1つの調査区域に1週間〜10日間程度滞在し、LIPIの研究所員や国立公園のレンジャーと共にひたすら山道を歩く。山道を

50mずつに区切り、区間ごとの移入植物の種類や被度、最大樹高、林冠の被度(日射の度合い)などのデータを集め、各移入植物の広がり方や被度を分析。地域の生物多様性を圧迫する移入種を明らかにした。調査区域内には飲食店がないため、調査前に食糧の調達や調理など生活の面倒を見てくれるヘルパーを自分で雇うという経験もした。「実際に調査地に行ってみたら自分のテーマと合わない場所だったり、体調を崩したりと苦勞の連続でしたが、周りのサポートもあって無事調査を終えられました」

これから博士号取得に向けてさらに研究を続けていく工藤さん。今後はバダンなどの島へ渡り、島ごとの移入植物の分布の違いを比較する研究をしたいと意欲を燃やしている。



[指導教員からひとこと] 理工学研究科 鈴木 英治 教授

学部時代は千葉の植物を研究をしていた工藤君。ITPに参加して熱帯雨林の生物多様性を研究したいということで、私にメールをくれましたので、鹿大大学院の受験を勧めました。来年もITPに参加すれば、計4回行くことになります。良い研究成果が出ていますから、それらを基に博士論文を書いてくれることを期待しています。

- | | | |
|---|---|---|
| ① | ② | ③ |
| ④ | ⑤ | ⑥ |
| | | ⑦ |

- ① 国立公園内の山道。山道沿いを調べ、移入植物の種類や数のデータを取る
- ② 工藤さんが調べた移入種
- ③ 現地スタッフとフィールド調査中の工藤さん
- ④ グヌンゲデ・パンゲランゴ国立公園内のチプルウムの滝で
- ⑤ 調査地の一つ、ボドゴールでスタッフと
- ⑥ 国立公園内での調査を手伝ってくれたスタッフと
- ⑦ 派遣期間の最後に行われる研究発表

鹿大と海外の大学との間に 生まれた新たな関係

I T P の成果は派遣された個々の研究者だけにもたらされたわけではなかった。新たな研究者同士の交流が生まれ、鹿大と海外の大学・研究機関との連携をさらに深めることにも役立った。中には、新たな学術交流協定締結に発展した例もある。

平成19年のI T P 開始当初、鹿大が海外パートナー機関として連携していたのは4カ所だった。その後、他の大学との連携も深まり、現在、海外パートナー機関は8カ所にまで増えている。新しく海外パートナー機関となったのはインドネシアのボゴール農科大学とバンドン工科大学、タイのカセサート大学とスラナリ工科大学の4つ。いずれも農学系・生物系が充実している大学で、熱帯域の生物多様性保全をめざす鹿大のI T P の派遣先として最適な大学ばかりだ。また、鹿大の教員との共同研究や、留学生受け入れの実績がある大学でもあり、鹿大とのつながりが深い。研究可能な地域が広がったことで、若手研究者にとつてのフィールドワークの選択肢も増えた。この4大学とは大学間学術交流協定も締結した。

鹿大と海外パートナー 機関との連携の深まり

海外パートナー機関との 共同企画も

I T P では、鹿大が若手研究者を派遣するだけでなく、海外パートナー機関と連携した共同企画も行っている。毎年、海外パートナー機関で、学生の研究発表の他に、双方の大学の教員による発表や、アメリカ



電車で鹿児島に到着した海外パートナー機関の若手研究者の出迎え



LIPIでのワークショップ終了後の記念写真

海外パートナー機関の位置図



屋久島の研修センターで講義を受ける鹿大と海外パートナー機関の若手研究者



鹿大で行われたワークショップでのポスター発表風景

から研究者を招いて招待講演を行うなどしている。この共同企画は同じ生物多様性について研究する教員・研究者が交流し、高め合う場として定着してきた。現地の学生も毎年100人ほど参加し、刺激になっている。これまでにアンダラス大学やインドネシア科学院生物学研究センター(LIPI)、ボゴール農科大学、バンドン工科大学で共同企画

を実施した。

また、海外パートナー機関の若手研究者を鹿大に招くJSPSの招聘プログラムも実施。生物多様性専門とする若手研究者が鹿児島に約1カ月間滞在し、鹿大の研究室に所属して研究テーマを深めてもらう企画などを行った。教員や研究者の間に新たな交流が生まれ、新しい研究に発展することが期待される。



ITP運営委員会委員長
鈴木英治理工学研究科教授
インタビュー

鹿大のITPは平成19年〜平成23年の間にインドネシア科学院生物理学研究センター(LIPI)への派遣13人、サバ大学への派遣13人など、

延べ46人の大学院生を東南アジアの大学・研究機関に派遣してきました。来年も10人程度を派遣する予定です。また、大学の事務職員の国際感覚を養うことを目的に、毎回2、3人ずつ事務職員の派遣も行いました。

派遣された大学院生は人によって多少のレベルの差はあるものの、皆それぞれに自分で考え、試行錯誤しながら限られた時間・環境の中で工夫して研究成果を出してきたと思います。派遣期間中に困ったことが起こり、院生から私のところへメ

ールで相談が来ることもありました。慣れない食事などで体調を崩し、大変きつい思いをした人もあったでしょう。しかし、皆、出発前より格段に成長して帰ってきます。派遣期間の最後に英語で研究成果を発表させたことも、彼らの成長を後押ししたのではないのでしょうか。それまで学会発表をしたことのないような院生でも、寝ないで資料を作り、準備を重ね、何とか発表を成功させています。こうした2カ月間は

若いうちに海外で勉強することは力になります

研究に専念できる時間であると同時に、貴重な人生経験の時間であったといえます。

「熱帯域における生物資源の多様性保全のための国際教育プログラム」は平成24年に終了します。この支援を受けた5年間で熱帯域の大学・研究機関と今まで以上の信頼・協力関係を築くことができ、教育・研究が一層進めやすくなりました。海外をフィールドに研究を行うには、現地のパートナーがいなければ難しい面が多々あります。その点で、この5年間の交流の蓄積は鹿大の将来にとっても大きな

意味があったといえるでしょう。

大学院まで修了しても、実際に研究者になる人はそう多くはありません。それでも数カ月間海外に滞在し、研究したということは良い経験となっているはずです。若いうちに海外で勉強することは刺激になりますし、後の人生を生きていく上でも大きな力になります。こういう機会があれば、学部生・院生には積極的に参加してほしいと願っています。



5年間の成果を生かしアジア諸国と連携した教育・研究を継続

5年間のITPが終わろうとしている。派遣された若手研究者の中には、ITPで得られた成果を盛り込んだ修士論文や博士論文を仕上げ、学位を取得した大学院生も出ている。前出の河野さんは大学院修了後に研究職に就き、現在も植物と水銀に関する研究を続けている。「若手研究者の育成」という意味では、鹿大のITPは十分な役割を果たしたと言えるだろう。

そして、ITPは若手研究者の育成だけでなく、鹿大とアジア諸国の大学・研究機関との連携をより一層深めるという効果ももたらした。鹿児島大学憲章には、「アジアや太平洋諸国との連携を深め、研究者や学生の双方向交流および国際共同研究・教育を推進し、人類の福祉、世界平和の維持、地球環境の保全に貢献する」と謳われている。今後あらゆる機会や制度を利用しながら、鹿大とアジア諸国の若手研究者の交流や教育は継続していく。また、熱帯域の生物多様性保全の研究に力を入れてきた鹿大の歴史と伝統を絶やすことなく、ITPを機に信頼関係を深めた海外パートナー機関と連携し、さらに活発な研究活動を進めていく。

ピア☆びあ☆かごしまが毎月第3土曜日に開催する「びあすてーしょん」(かごしま県民交流センター内)の指導をする下敷領准教授



国内外でデートDV 予防教育の研究を展開

助産師と看護師の資格を持ち、臨床経験のある医学部保健学科の下敷領須美子准教授。ここ10年ほど、「デートDV」の研究に取り組んでいる。鹿児島県内の高校へ出向き、デートDVの予防教育を行うことも多い。平成21年からはインドネシアの高校生を対象とした研究も始めた。



ピア☆びあ☆かごしまの活動の様子

医学部 保健学科 看護学専攻 准教授 下敷領 須美子

しもしきりょうすみこ / 昭和26年大阪府生まれ。昭和48年から看護師・助産師として医療機関に勤務。その後、約7年にわたり看護学校等での教員を務める。平成2年東洋大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士前期課程修了。修士(社会学)。平成11年鹿児島大学医学部保健学科講師に就任。15年同助教授に昇格。19年より現職。専門は母性看護学、助産学、家族福祉。NPO法人「Reばーす」理事。日本母性衛生学会員。日本助産学会員。

医

学部保健学科の下敷領須美子准教授は、助産師・看護師として病院に勤務してきた経歴を持つ。助産師を志したのは看護学生時代。妊婦が正常な状態を保つていけば、医師がいなくとも分娩管理ができ、開業もできる助産師に憧れた。「自立して仕事をできる点が魅力でした」と下敷領准教授は助産師の魅力を語る。

「家族の幸せ」とは？
学び直しを決断

「家族の幸せ」とは？ 学び直しを決断

京都大学医学部附属助産婦学校卒業後に助産師の資格を得た下敷領准教授。助産師として働き始めてからは、やりがいを感じながらも、妊娠・出産期を異常なく過ごしてもらったことだけが助産師の仕事なのかと考えるようになったと言ふ。「妊娠・出産は喜ばしいことです。親になるという役割の変化や経済的なリスクも伴います。「家族の幸せ」って何だろうと深く考えるようになった。新しい家族の一員を迎えて家族として発達していくための環境や条件について勉強したいと思い、大学入学を決断しました」。大学院へも進学し、家族の発達課題についての研究を続けた。「社会福祉学の視点で見ると、結婚・妊娠・出産・子育てに関わる問題は全

【ピア☆びあ☆かごしま】活動案内

毎月第3土曜日14時～16時、かごしま県民交流センター1Fの交流サロン・ミーティングルームにおいて「びあすてーしょん」を開催しています。ピアカウンセラーの認定を持つ鹿大生が、若者を対象にさまざまな悩みについての相談に対応します。ぜひご利用ください。

中学・高校生を対象にした
ピアカウンセリング・ピア教育

年度	ピアエデュケーション		ピアカウンセリング	
	中学・高校数	生徒数	回数	生徒数
2003			2	55
2004	2	525	2	22
2005	2	247	2	16
2006	5	922	2	31
2007	3	439	1	7
2008	3	529	1	12
2009	3	565	1	9
2010	7	1,394	1	11
合計	25	4,621	12	163

(2003-2010 年度活動実績)

て社会の抱える課題につながっていることがわかる。リスクや不安はあるけれども頑張つて妊娠・出産し、家族を持ちたいと若い人たちが思えるような社会にしたい、と考えながら研究を続けています」

デートDVの研究と
県内高校生への予防教育

下敷領准教授が近年取り組んでいるのが「デートDV」の研究である。鹿児島県内の高校生を対象にデートDVに関する意識・実態調査を行い、その予防教育にも力を入れている。DVはドメスティック・バイオレンスの略称で夫婦間に起こる暴力として知られるが、デートDVは、恋人間に起こる暴力のこと。どちらも、力で相手を支配する点は同じである。長くDV被害者支援にも携わってきた下敷領准教授は、愛し、愛される関係の中で暴力が起こ

る背景をこう語る。「一つには『ジェンダーのとらわれ』があります。社会的・文化的に規定された性差(ジェンダー)にとらわれ過ぎると『リードできる強い男性』『従順でかわいい女性』といった男らしさ女らしさの決めつけが起こり、相手や自分が必要にあてはまる生き方をしなければならぬと思ってしまうのです」

また、現代の若者が置かれている環境もデートDVを助長しているという。「今は携帯電話やパソコンで情報を手軽に入手できる時代。これらの情報はいかに多くの人々に消費されるかを目的に意図的・人為的に構成されており、現実にはありえない設定や刺激に溢れている。ケータイ小説やアダルトビデオはその最たるものです。ところがそうしたものをみると、現実にあることだと思ってしまうのも多い。中学・高校時代は異性と親しい関係を結び始める時期で



ピア☆ぴあ☆かごしまに所属する鹿大生による種子島中央高等学校でのピアエデュケーション活動。生徒たちはグループワークを通じ、デートDVや性についての知識・考え方を学んでいく

すから、ケータイ小説やビデオに出てくる『束縛されるのが愛』『愛しているなら全てを受け入れられるはず』というイメージと現実を混同してしまうのでしょうか」

若いうちの予防教育が大切と考えた下敷領准教授は、鹿児島県と協力して、県内の高校でデートDVの予防教育の研究を行っている。平成18年〜22年までに39校、計延べ1万6235人の高校生に予防教育を実施。また、鹿大医学部のボランティアサークル「ピア☆ぴあ☆かごしま」の顧問として、ピアカウンセラーの鹿大生が行うデートDVの啓発活動もサポートしている。「ピア」は英語で「仲間」のこと。年齢の近いピアカウンセラーの学生が若者にデートDVの知識を伝え、相談に乗る。相談者の本音・共感が得られやすく、啓発の効果は高いと下敷領准教授はみている。

インドネシアの高校生を対象に
ピアカウンセラーの訓練

平成21年からはインドネシアの高校生を対象に、性やDVに関する調査・研究も始めた。イスラム教国であるインドネシアは未婚者の男女交際や性的関係をタブー視している。望まない妊娠や性感染症の多さ、妊産婦死亡率の高さといった

問題がありながら、宗教上の背景から学校での性教育がしづらという事情もある。そこで下敷領准教授は、性や生殖について若者同士で学び合う仕組みをつくるため、ピアエデュケーションを軸とした性教育活動を提言。平成23年度中にはピアカウンセラーと共にインドネシアを訪れ、現地の高校生の中から数人を選んでピアカウンセラーとして養成し、学んだことを学校に持ち帰って同級生に伝えてもらおうと考えている。

下敷領准教授の研究は、人が男性、女性という枠から離れ、一人ひとりの人間として尊重し合うことを教えてくれる。「今の若い世代は、一昔前に比べれば『仕事は男性、家事・育児は女性』といった固定的な考え方をする人が少なくなっています。しかし、周囲の反応を気にして、いざ結婚すると『妻が家事をしたほうがうまくいく』『子どものために自分が犠牲になればいい』という考えを持ってしまいがち。その選択は本当に自分らしく生きることにつながるのか、と自らに問いかけながら、相手と話し合い、互いを大切にできる生き方を見出していくことが大事です。これからも地元の課題を中心に、教育・研究活動を進めていきたいと考えています」



地域医療支援システム学講座のスタッフたち。高松英夫特任教授・地域医療支援センター長(中央)、東桂子特任助教・地域医療支援センター副センター長(右から2人め)

鹿大の新たな試み

Challenges of
Kagoshima University

地域の医療問題解決に取り組む 寄附講座「地域医療支援システム学講座」開設

鹿児島県に一人でも多く医師を増やしたい——。医師不足問題に悩む鹿児島県からの支援により、鹿児島大学医学部・歯学部附属病院に寄附講座「地域医療支援システム学講座」が設置された。3年をかけて、地域の医療体制や医師の支援体制整備などに役立つ研究を行っていく。

地方での医師不足が問題となっている。新しい医師臨床研修制度が始まった平成16年度以降、地方の大学医学部を卒業した研修医が都市部での研修を志望し、研修終了後も地方に戻らないことが多くなった。このため地方の医療機関の医師は減少し、医師一人あたりの負担が格段に増えた。疲弊して、休職を余儀なくされる医師も増えている。

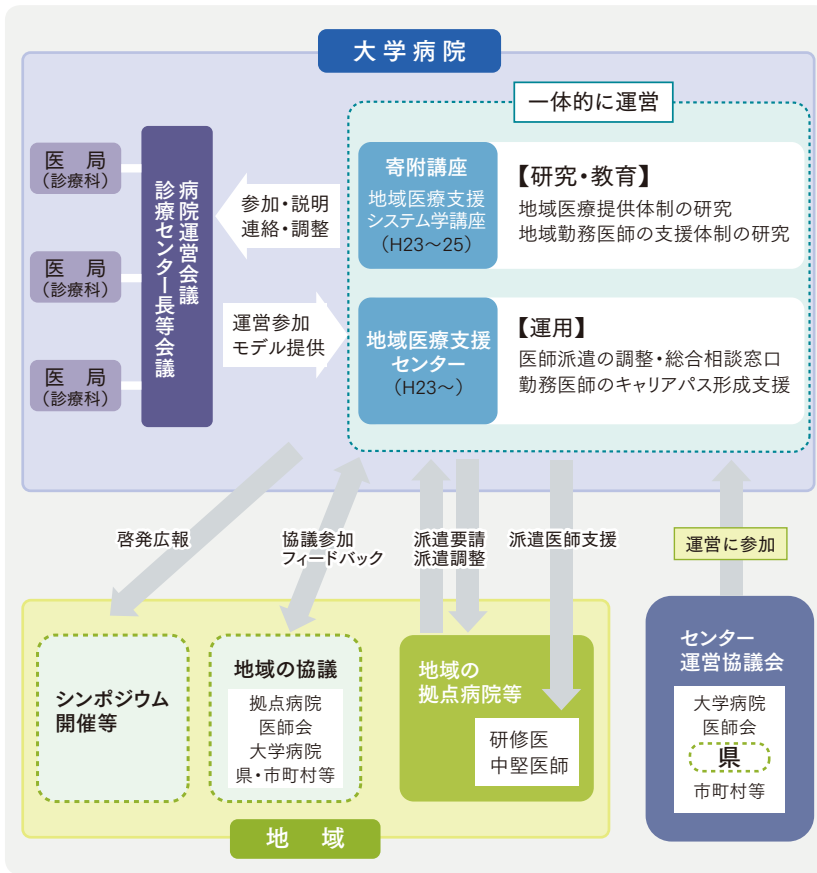
この深刻な医師不足を解決するため、平成23年度から鹿児島大学は鹿児島県からの寄附を基に、寄附講座「地域医療支援システム学講座」を開設した。寄附講座の開設は、県が策定した「地域医療再生計画」に基づくもので、期限は3年。平成25年度までに総額3億円(予定)の支援を受け、地域の医療体制や、地域医療にたずさわる医師の支援体制について研究を進める。医学部・歯学部附属病院内に「地域医療支援センター」も設置し、研究成果は速やかに具体化する。

特任教授には高松英夫・前医学部・歯学部附属病院長が就任。そのほか、東桂子特任助教やメディアカルソーシャルワーカーなども加わり、5人のスタッフで研究を行っていく。

地域の实情に合わせて 適切な医師配置を検討

寄附講座のもっとも大きな仕事は、地域医療体制の分析・研究だ。県内を9つの「医療圏」という地域に分け、地域ごとに協議会を開催し、それぞれの医療体制を決めていくことになっている。協議会では地域の交通事情や人口などを考慮しながら、地域ごとに診療科や医師の配置などを検討する。また、高松特任教授自らが地域の病院を訪問し、病院長との意見交換も行っている。「実際に交通機関を利用したり、車で移動してみることによって、地域の交通事情や地勢を把握し、その実感を医療体制の構築に反映させることが大切と考えました」と高松特任教授は語る。地道なヒアリングを積み重ねながら各地域特有の問題を洗い出し、効率的な専門医派遣の仕組みづくりもめざす。「大学病院も医師数が減っています。高度先進医療を提供しながら、地域からの専門医派遣の要請に応えることは大変難しい。しかし、『大学病院から人は出せません』というのでは、地域医療が成り立ちません。現場の医師が疲弊することなく地域医療を維持していくためには、地域ごとに提供する医療の内容を検討・整理してもらい、それ

地域医療支援システム学講座と 地域医療センターのイメージ図



3月23日、鹿児島大学と鹿児島県は寄附講座「地域医療支援システム学講座」の協定を締結した(右から)伊藤鹿児島県知事、高松特任教授、吉田鹿児島大学長



4月8日には寄附講座「地域医療支援システム学講座」と「地域医療支援センター」看板上掲式が行われた(右から)中俣鹿児島県保健福祉部地域医療整備課長、瀧之上鹿児島県保健福祉部次長、熊本病院長、高松特任教授

に合わせて大学病院からの医師派遣を考えていく必要があります」。県は平成23年度中に、地域ごとの医療体制や各地域に必要な医師の配置の概要を示した「地域医療フェニックスプラン」を作成する。同プランの作成には、地域医療支援システム学講座が積極的に協力する。

**地域の医師を支援する
研修システムやデータベース構築**

寄附講座では、地域の医療機関で働く専門医のための研修・就業支援に関する研究も行う。都市部以外の病院が医師不足に悩む要因として、学会や研修への参加といった十分な勉強ができないことや、専門外の患者も診察しなければならぬことに對する不安が挙げられる。こうした不安を解消するため、大学病院で研修医が使用する e-learning システムを地域の医療機関で働く医師も利用して専門医としての研鑽を積むことができるよう、内容の専門性を高め、実用に向けた研究を進める。また、地域で働く医師が専門外の患者や難しい症例にも適切に対応できるように、簡単な操作で迅速に専門医に相談できるシステムについても研究していく。加えて、退院予定の

寄附講座では、地域の医療機関

で働く専門医のための研修・就業

患者の次の受け入れ先病院を探すのに役立つデータベースの構築についても研究を行っている。医師の個人的なつながりに頼る受け入れ先探しでは限界がある上、診察や治療といった本来の仕事に専念しづらくなる。データベースを利用して医療ソーシャルワーカーなどが患者に受け入れ先を提案できれば、医師は現場の仕事に専念できる。また、仕事の負担が軽減され、疲弊防止にもつながる。

こうした研究の成果は地域医療支援センターが窓口・実行役となり、寄附講座と協力しながら運用していくことになっている。寄附講座終了後も地域医療支援センターは残り、鹿児島県や医師会、市町村と連携しながら、システムやデータベースの運用を行い、地域医療支援のための調整・相談窓口として活動を続けていく。

深刻な医師不足を短期間で解決するのは難しい。ただ、寄附講座の3年間で医療体制・医師支援の仕組みを大まかにでもつくり上げることが大切と高松特任教授は考えている。「地域の皆さんとキャッチボールを重ねながら、一人でも鹿児島県内に医師が留まるような環境づくりをしていきます」

警察官の
仕事には
飽きることが
ないですね。

interview

Hayako
YONEKURA鹿兒島県日置警察署交通課長
警部

米倉 隼人康さん

● profile

1971年鹿兒島市生まれ。学校法人津曲学園鹿兒島高等学校卒業。93年鹿兒島大学教育学部中学校教員養成課程数学専攻卒業。同年4月鹿兒島県警察の女性警察官第1期生として採用される。警察学校の指導員などを経て、97年4月鹿兒島県警初の女性白バイ隊「さつまクイーンズ」のメンバーとなる。その後、県警本部交通企画課、奄美署（旧名瀬署）や中央署の少年係などを経て、2007年鹿兒島県警に創設された女性だけの部隊「第二機動隊特別小隊」の初代隊長となる。県警少年サポートセンターを経て、10年4月鹿兒島県警初の女性警部に昇格、日置警察署交通課長に就任。リラックス方法は温泉めぐり、パン作り。

※「アラムナイ」とは英語で同窓生のこと。
各界で活躍する鹿兒島大学の卒業生や留学生などの
ユニークな活動を紹介します。

秋の全国交通安全運動初日、
一日警察署長を努める子ども
たちの面倒を見る米倉さん

軽い気持ちで 女性警察官第一期生に応募

昔から警察官になりたかったわけではありませんでした。高校生になるまで、将来の夢なんて考えたことなかったですね。数学が得意でしたから、「教育学部の数学専攻はどうだろう、教員免許も取れるし」と考え、鹿大を受験しました。学生生活は楽しかったですね。人並みにアルバイトやサークル活動をして、好きな数学を学んだ、充実した4年間だったと思います。ただ、3年次の教育実習で「教員は自分に向いていないのでは」と感じ、別の就職先を探すことになりました。そんな時、鹿児島県警が女性警察官の第一期生を募集することを知ったんです。幼い頃から空手を習い、兄と一緒に野球をするような活発な性格でしたから、体を動かす仕事がいいなと軽い



95年、警察学校指導員時代の米倉さん

い気持ちで応募したところ、採用されて驚きました。

厳しかった 警察学校時代

警察学校に入校して1日目に早くも後悔しました。自由な大学生活から、管理される窮屈な寮生活に急に変わってショックだったんですね。早朝の点呼に始まり、法律、実務、術科(柔道や剣道)と勉強づけ。体力作りのための駆け足訓練までありました。さらに、私たちが教育するために警視庁から派遣された女性指導員の指導が非常に厳しかった。何度音を上げそうになつたことか。ただ、絶対に途中で投げ出すことだけはしたくないと思っていました。今思えば、その厳しさには理由があることがわかります。警察官の仕事の現場は、厳しいものです。人一倍、相手への気遣いも求められます。一つひとつの規則・規律を守り、自分に厳しく、他人のことを思いやれる人間であつてこそ、地域の安全を守ることができるようなのです。そのためにはこういう教育が必要だったのだと、卒業後に気付きました。卒業後すぐの交番勤務は楽しくて仕方なかったですね。経験したことのないことばかりですし、

学んだことを実践できる喜びもありました。また、交番勤務は人と接する機会がとて多く、人と話をするのが好きな私に向いていたようです。



白バイに乗る米倉さん

一人の警察官として 一生懸命に働きたい

97年、鹿児島県警初の女性白バイ隊「さつまクイーンズ」のメンバーになりました。白バイは体力のある若いうちしかできませんし、普段から大型バイクに乗っていましたが、ここでの訓練も大変でした。約300キロの白バイに朝から晩までひたすら乗る生活。腕は筋肉でパ

ンパン、体はアザだらけ、手にはタコがいっぱいできましたが、技術で体力をカバーするコツをつかむことができました。9カ月の訓練の後は普段の取締りだけでなく、長野五輪のマラソンの伴走をする機会も頂きました。

交通課長となりましたが、職場には私より年上の方々がたくさんおられます。言うべきことは言いますが、ベテランの方々から学ぶことはまだまだたくさんあります。管理職として署長の補佐をしたり、課同士の連携に気を配るといった仕事も加わりました。与えられた仕事をやるだけでない、一つの課のトップとしての責任を感じています。

体力では男性に劣りますが、女性の要人の警衛・警護や女性被害者のケアなど、女性だからこそできる仕事もあります。何をしても「女性初めの〜」という枕詞が付くことでプレッシャーはありますが、一人の警察官として一生懸命に仕事をすれば、必ず誰かが見ていて応援してくれるものです。そうした周りのサポートにこれまで助けられました。モチベーションは「やればできる」。臨機応変な対応が求められる警察官の仕事には飽きることがありません。



シーラさんのインタビュー

でも、後悔しているより、やって後悔したい。
でも、後悔したことは今まで一度もないですね。



五藤 雅人さん

医学部医学科6年
[愛媛県出身]
愛媛県立松山東高等学校卒業



ケンブリッジ大学の卒業式での五藤さん

「異色の経歴」という言葉は、五藤雅人さんのためにある言葉かもしれない。子どもの頃から宇宙に憧れた五藤さんは、宇宙工学の道を志し、琉球大学工学部に入学。しかし、より最先端の工学を学びたいと、英・ケンブリッジ大学への入学をめざし、渡英した。シユールズベリーという小さな町の高校で勉強を続け、97年ケンブリッジ大学に入学。同大で工学修士を取得後、仏の国際宇宙大学にも留学した。

そこで有人の宇宙ステーションやスペースシャトルなどについて学ぼうと、工学に加えて医学の知識も必要だと考えるようになる。宇宙医学の世界が人材や物資に制限のある「離島医療」に近いことも分かり、ますます医学への興味がかき立てられた。「元々、島が大好き。工学やコンピュータを学ぶ中で、人と関わる仕事をしたという気持ちも芽生えた。それなら臨床医はどうか。周りが少しでも安心して、今より笑顔になれる。そのお手伝いができるような医師になりたいんです」

それからの行動は早かった。ホームヘルパーの資格を取り、石垣島でヘルパーとして働きながら島の生活や医療の現場を自分の目で見てきた。その後、離島医療を学べるという理由で鹿大医学部に入学。離島での研修にも積極的に参加した。1・2年生の頃は週4日、ホスピスの看護助手として終末期医療の現場でも働いた。限られた時間を有効活用しながら、理想の医師像に近づこうとしている。「厳しくても、自分が『わくわく感』を感じられる道を選んできました。周りに目標を話すと『そんなのできるわけない』と言われるけど、できるか否かを判断するのは自分。やらないでいるよりやって後悔したい。でも、今までやって後悔したことは一つとしてないですね」

私の座右の銘

ナナイロコトバ

「人間は一生のうち逢うべき人には必ず会える
しかも一瞬も早すぎず、一瞬も遅すぎない時に」

この言葉は、鬼丸昌也さんの『こうして僕は世界を変えるために一步を踏み出した』という本で見つけた言葉です。これまで、私は人との出会いを一番大事にしてきました。今思い返すと、あの時のあの人との出会いがここでつながった、この人と絶妙のタイミングで出会うことができたということに気がきます。



鹿大では社交ダンス部に所属。「ダンスが大好きなんです。最近、バレエも習い始めました」



馬の喉頭片麻痺の手術風景(手術準備室)

全国で唯一の大学にある馬専門診療施設

南九州は古くから軽種馬(競走馬や乗馬)の主要な産地であり、温暖な気候から馬の休養地にも適した場所でした。しかし、馬のための専門の診療施設がなく、高度医療に対応できない状況でした。このような状況を改善するため、(社)日本軽種馬協会が日本中央競馬会の特別振興事業として(財)全国競馬・畜産振興会の助成を受けて造られたのが、鹿児島大学農学部附属の「軽種馬診療センター」です。平成20年12月の竣工後、センターは鹿大に寄贈され、平成21年4月から診療を開始しました。センター長は三角二浩獣医学科教授。全国の獣医系大学でも2人しかいない馬専門獣医師の1人です。

センター1階は馬のための診療・手術設備が整っています。ハイクリーン陽圧手術室はフィルターによって空気を清浄に保ち、適切な空気圧と気流方向が維持されている手術室で、骨折などの整形外科手術が行われています。開腹手術や外傷手術などは手術準備室で実施。手術は年間約30頭、診断・治療は年間約100頭前後にも上ります。

今後は、骨・筋肉・腱・靭帯といった運動器機能再建のための新しい治療法、実用的な治療法の提案なども積極的に進めていきます。また、平成23年度中には往診用の車両を用意し、学外での検査や治療にも対応できるように準備を進めています。

軽種馬診療センターは、全国で唯一の、大学にある馬専門の診療施設です。馬の獣医師をめざす若者の教育の場として、またすでに現場で活躍している獣医師の卒後教育の場として貢献できるよう、教育・研究活動を続けていきます。



ハイクリーン陽圧手術室



倒馬室



農学部附属動物病院
軽種馬診療センター
〒890-0065
鹿児島市郡元1-21-24
診療時間 9:00~11:30、13:00~15:00
休診 水曜日午後、土日祝日
動物病院事務係
TEL 099-285-8750 FAX 099-285-8751

吹奏楽指導者のためのワークショップ in 鹿児島大学を開催

7月20日、教育学部の卒業生で指揮者の下野竜也さんを講師に迎え、「吹奏楽指導者のためのワークショップin鹿児島大学」が教育学部学生食堂「エデュカ」で開催されました。

このワークショップは、7月21日から開催された第32回霧島国際音楽祭2011のプレイベントとして下野さんのたつての希望により開催されたもので、教職員、学生、吹奏楽指導者、一般市民など約300人が参加し、立ち見がでるほどの盛況でした。

ワークショップでは、本学の学生、中学校、高校の吹奏楽指導者の先生3人が、それぞれ実際に鹿児島大学吹奏楽団を指揮し、指

導にあたって悩んでいる点などを下野さんに相談しました。下野さんから、笑いを交えながらも的確なアドバイスをいただき、3人の指導者はもちろん、吹奏楽団の学生たちにとっても有意義な時間となりました。

最後に下野さんの指揮で演奏し、参加者からは盛大な拍手が贈られました。



東日本大震災復興支援のため、リユースPCを発送



ボランティア学生による作業

7月5日、学術情報基盤センターにて東日本大震災復興支援リユースPC発送式が行われ、吉田浩己学長、会田和弘特定非営利活動法人イーパーツ常務理事、島秀典企画担当理事、森邦彦学術情報基盤センター長、ボランティア学生らが出席しました。

リユースPCの寄贈は、東日本大震災の支援事業の一環として、5月10日に特定非営利活動法人イーパーツとの間で締結した同意書に基づき執り行われたもので、ボランティア学生が授業の合間を利用してPCの洗浄、ソフトの設定・入れ替えなどを行ったうえで被災地の方へ寄贈します。本学からは100台のリユースPCを発送することを予定しており、今回、第一弾として30台が箱詰めされ、宮城県仙台市の小学校・幼稚園の避難所の方々、仮設住宅の集会所などに発送されました。

農学部公開講座「イチゴの高品質果実の高収量・安定生産の基本」を開催

農学部は、8月24日、公開講座「イチゴの高品質果実の高収量・安定生産の基本」を開催し、イチゴ生産農家、JAイチゴ部会会員、鹿児島県・市町村関係者、学生など128人が参加しました。



会場の様子

この公開講座は、イチゴ生産関係者から、イチゴの収量が思わしくなく経営も厳しくなっており、本学で基本技術を根本から学ぶことができないかとの相談を持ちかけられたことがきっかけで、関係教員、関係機関等と調整して開催することとなったものです。

参加者は、野菜の休眠、花芽形成などの基礎から、イチゴに特化した生態・生理、品種、栽培技術、増収に向けた対策などの実践的な内容まで各講師の説明に聞き入っていました。

生物多様性シンポジウム鹿児島大会を開催

10月15日、稲盛会館において生物多様性シンポジウム鹿児島大会が開催され、環境に関心をもつ市民、教職員など約230人が参加しました。環境省では、昨年10月に開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を受けて、生物多様性国家戦略の改定等を行うこととしており、同シンポジウムは広く意見を聞くことを目的として、全国8カ所で開催される生物多様性地方座談会の第1回目として開催されたものです。

シンポジウムでは、渡邊綱男環境省自然環境局長から「生物多様性を取り巻く昨今の状況」と題した環境省報告があり、本学の宮本旬子理学部准教授ら3人から、鹿児島の自然や社会の取り組みについて紹介がありました。引き続き行われたパネルディスカッションでは、学術基盤の調査研究を公表・周知することで人々が生物多様性に気づく仕組みをつくることなどについて意見が述べられ、改定生物多様性国家戦略の策定に向けての有意義な機会となりました。



パネルディスカッションの様子

▶ 水産学部附属練習船かごしま丸代船 命名・進水式を開催

水産学部附属練習船かごしま丸代船の命名・進水式が、9月30日、新潟造船株式会社(新潟市)にて執り行われ、吉田浩己学長、野呂忠秀水産学部長をはじめとする大学関係者、新潟造船株式会社代表取締役社長 田中哲雄氏、社団法人海洋水産システム協会専務理事 長島徳雄氏、財団法人日本海事協会東京支部長 勝亦二郎氏、新潟造船株式会社の関係者約30人が出席しました。

命名式において附属練習船代船は「かごしま丸」と命名され、引き続き執り行われた進水式では、吉田学長より支綱切断が行われ、無事に進水が完了しました。



進水が完了したかごしま丸

命名・進水式終了後の直会では、船主代表挨拶として吉田学長より「新しいかごしま丸は、水産学部の学生・大学

院生が水産・海洋分野の技能を習得する場としてのみならず、全学部学生が進取の気風を涵養する施設として利用されることが期待されています。」と挨拶がありました。

新かごしま丸は、全長66.9m、幅12.10m、深さ4.60m、総トン数935t、平成24年3月末竣工・引渡し予定となっています。

▶ 「奄美防災シンポジウム」を開催

10月23日、奄美市名瀬公民館にて「平成23年度防災・日本再生シンポジウム 奄美防災シンポジウム～奄美豪雨災害から学ぶ～」を開催し、豪雨災害にあわれた奄美市、龍郷町、大和村の方々が多数参加しました。

シンポジウムでは、下川悦郎地域防災教育研究センター長の司会のもと、「奄美大島における降雨流出特性の解明に向けて／安達貴浩 理工学研究科准教授」、「土砂災害の実態と特徴／地頭菌 隆 農学部准教授」、「道路災害の特徴／北村良介 理工学研究科教授」、「奄美豪雨災害における情報通信体制等の検証／升屋正人 学術情報基盤センター教授」、「医療・福祉からみた奄美豪雨災害の実態と特徴／嶽崎俊郎 医歯学総合研究科教授」、「学校コミュニティにおける災害心理／関山 徹 教育学部准教授」、「農業災害－永年性作物である果樹を中心に－／富永茂人 農学部教授」、「豪雨災害による河川生物への影響－特にリュウキュウアユでの例－／四宮明彦 水産学部教授」、「突発性の災害と復旧・復興の新時代／山田 誠 法文学部教授」、計9件の報告が行われました。報告会終了後、「防災対策の在り方、地域復興策等」と題した討論と聴講者があらかじめ用意していた質問票を中心に質疑応答が行われました。

本来難しい内容である防災報告や災害の実態等を一般の方にも分かりやすいように工夫して説明が行われ、会場を訪れた人々は熱心に聞き入っていました。



討論の様子

▶ 南米における「進取の気風」研修プログラムを実施

鹿児島大学では、「進取の気風」にあふれるチャレンジ精神を持つ人材の育成を教育目標の一つに掲げ、様々なプログラムを実施しており、今年度は新たに共通教育科目として日本学生支援機構(JASSO)の平成23年度留学生交流支援事業(ショートステイ・ショートビジット)である「南米における進取の気風研修計画」を、8月16日から28日まで13日間、ブラジル及びパラグアイで実施し、12人の学生が参加しました。この研修は、昨年、吉田浩己学長らがブラジルを訪問した際に、鹿児島県出身の移民の方々の生き様に感銘を受け、本学の学生達に学ばせたいとの思いから、地元の県人会と本学との連携事業の一環として企画されたものです。現地の日系移民(主に鹿児島県出身者)の歴史を学び、現地での農業開発事情等を学ぶことにより、「進取の気風」を育む教育効果を得ることを目的として企画されたもので、ブラジルやパラグアイの鹿児島県人会等の協力を得て実現しました。

参加した学生たちは、サンパウロ市内で鹿児島県人会による移民の歴史について講義を受けた後、イツ市やソロカバ市で現地の産業や歴史を学び、地元の住民宅でのホームステイや、サンカルロス大学での交流会などに参加しました。さらに、日系移民の方々が経営するパラグアイのイグアス移住地での農場体験実習にも参加し、先人達の偉功を肌で体験する大変有意義な研修になりました。



サンパウロ市内で鹿児島県人会の人々と

▶ 留学生センター“Study Kagoshima Short Stay Program”を実施

留学生センターでは、8月17日から28日までの12日間、海外の協定校等からの学生10人が参加する日本学生支援機構(JASSO)の平成23年度留学生交流支援事業「スタディ・カゴシマ・ショートステイ・プログラム」を実施しました。同プログラムは、日本語未習得者を対象に日本語の集中研修を軸に、英語による異文化理解関連科目や鹿児島事情関連科目を組み合わせ、日本の地方都市あるいは地方大学の魅力を発見してもらい、将来の長期的な学術研究、留学などへのモチベーションを高めることを目的として企画されたものです。

中国、韓国、インド及び米国からの参加者は、午前中は主に日本語を学び、午後は英語による異文化理解、鹿児島の医療事情や自然環境などをテーマとした講義を受けました。さらに、鹿児島市内にある博物館や島津藩の別邸等を見学するなどして、様々な角度から鹿児島について知見を深めました。



仙巖園で桜島を背景に

▶ 禁煙支援公開講座～楽しい禁煙支援のすすめかた～を開催

保健管理センターでは、10月20日、禁煙支援のための公開講座を稲盛会館で開催し、学生や教職員、一般市民など約200人が参加しました。



講演の様子

公開講座では、禁煙支援の第一人者として活躍中の奈良女子大学大学院教授で日本禁煙科学会理事の高橋裕子氏が「あなたとあなたの大切な人を守ろう～楽しい禁煙支援のすすめかた」と題し講演を行い、様々な角度から禁煙の必要性や周囲が禁煙支援をすすめる上での注意点などについてアドバイスがありました。講演終了後に回収されたアンケートでは受動喫煙の有害性を再認識できた、大学を数地内禁煙にすべき、身近な人に禁煙をすすめていくうえで大変有意義な講演となりました。

▶ 理工学研究科 南方小学校で出前授業を開催

8月22日、理工学研究科技術部は鹿児島市立南方小学校において、出前授業「ものづくり・科学実験」を開催しました。この出前授業は、子どもたちの理科離れが叫ばれる今日、小学生の時から実際に科学実験やものづくりを体験し、その面白さや不思議さなどを実感してもらうことにより、科学分野への興味や関心が促されることを期待しつつ、地域連携活動の一環として今年度からはじめたものです。

第1回の今回は、南方小学校の4年生から6年生の児童25人とその保護者らが参加し、技術部からは職員21人が同校を訪れました。まず、全員を集めて、「液体窒素のおもしろ実験」が行われ、バラ、バナナ、風船、ボールなどを液体窒素に浸けるとどのように変化するかを実験しました。引き続き、「人工イクラを作ろう」、「光の万華鏡」、「すいすいUFOを作ろう」等のコースに分かれ、技術職員の説明を聞いたり、手伝ってもらいながら、子どもたちは実験や工作を楽しみました。



液体窒素のおもしろ実験

▶ 吉田学長一行、中国内の協定校を訪問

吉田浩己学長は、9月22日から28日までの7日間、中国を訪問し、湖南農業大学及び中国東北大学を訪問するとともに、北京市及び瀋陽市在住の本学卒業生等と会い、鹿児島大学友好大使を委嘱しました。

今回の中国訪問は、湖南農業大学の創立60周年記念式典への招聘を受けて実現したもので、岩元泉農学部長及び湖南農業大学出身の侯徳興農学部教授を伴い記念式典及び関連行事に参加しました。湖南農業大学は1989年に本学と学術交流協定を締結して以来、農学部を中心に共同研究や学生の受入等活発な交流活動を続けてきており、本学との歴史の深い大学の一つです。

湖南農業大学訪問の後、瀋陽市にある中国東北大学を訪れ、

今年就任したばかりの丁烈雲学長を表敬訪問し、両大学の連携事業である学生の相互交流プログラムやその他の交流活動について、今後も一層協力して推進していくことを確認しました。

その後、本学の卒業生である中国医科大学教授及び中国人民大学商学院(北京市)教授の3人に本学の海外ネットワーク事業の鹿児島大学友好大使を委嘱し、帰国しました。



湖南農業大学記念式典会場で岩元農学部長、侯教授らと

大隅にある、ただ一つの鹿大の拠点。 鹿大との連携・交流が一層進むことを期待します。

大崎町長

東 靖弘氏



■ ものづくり会館と鹿児島大学大崎活性化センター開設

大崎町と鹿児島大学は以前からつながりがありましたが、そのつながりがより深まったのは2008年頃からです。大崎町には自動車などの部品を作る金型企業がありますが、2008年秋のリーマンショックでこうした企業の売上が大幅に落ち込みました。個々の企業がもっと体力をつけようと、以前からこれらの企業とお付き合いのあった理工学研究科の小原幸三教授に協力を頂き、人材育成教育や共同研究がスタートしました。

そのうち、企業側から町に対し、教育・研究のための施設提供を求める声が上がりました。鹿大との連携により企業に活力が戻れば、町にとっても大きなエネルギーになります。私たちはこの意義ある提案に乗り、平成23年6月に「大崎ものづくり会館」をオープンさせました。金型や焼酎、農産品加工など町内12社の企業の事業内容や製品紹介のブースを設け、企業と人が交流できるようになっています。会館内には、企業と鹿大が共同研究や研修を行う「鹿児島大学大崎活性化センター」も開設されました。鹿大と大崎町、企業が連携し、新しい地域資源の発掘やブランド化につなげたいと考えています。

■ 鹿大の橋渡してインドネシアへの国際貢献も実現

鹿大との連携により嬉しい出来事がもう一つありました。鹿大に橋渡しをしていただき、大崎町と町内の企業がインドネシア・デボック市にリサイクルのノウハウを提供することになったのです。大崎町はリサイクル率4年連続日本一を達成しています。企業を巻き込んで、町単位で国際貢献ができるのは考えてもみませんでした。これも鹿大のご協力のおかげです。

■ 大隅半島唯一の鹿大の拠点として

鹿大には地方の総合大学として、もっと自らの総合力を積極的にアピールしていただきたいと思います。鹿大に素晴らしい先生方や研究成果のあることはわかりますが、地域活性化にそれらをどう活かせばいいのかが私たちにはわかりません。私たちはもっと鹿大の力を知りたいと思っています。鹿大の先生方が地域の現場を見に来てくださる機会が増えれば、私たちも先生と現場を見ながら質問やお話がしやすくなるのではと感じています。

また、大崎町で住民が大学の先生方と触れ合う機会はなかなかありません。特に子どもたちにとっては、町にいながらにして感性を磨く機会がとても少ないのです。そこで、鹿大の先生方に講師となっていただき、ものづくり会館で子どもたちを対象に様々なことを指導していただく場を設けられたら、とも考えています。

鹿大との交流が進み、鹿大の先生方や学生さんが町を歩くことが日常になると嬉しいですね。鹿児島大学大崎活性化センターは大隅半島唯一の鹿大の拠点です。ここがますます大きくなるよう、町としても努力していくつもりです。鹿大の皆さん、センターをぜひ利用して、教育・研究活動を進めていってください。

ひがしやすひろ／昭和19年大崎町生まれ。昭和39年鹿児島県立有明高等学校卒業。昭和40年7月～平成10年12月大崎町職員、平成11年1月～平成13年6月同町助役を経て、平成13年12月大崎町長に初当選。平成21年12月の町長選挙で当選を果たし、現在3期目を務める。鹿児島県町村会理事、鹿児島県農業信用基金協会理事。

▶ 「かごしまルネッサンスアカデミー」第5期生修了式を開催

産学官連携推進機構は、9月17日、鹿児島の焼酎・黒酢など醸造や発酵を中心とする食産業を主体に地域再生を担う人材育成を目的とした社会人向け講座「かごしまルネッサンスアカデミー」第5期生修了式を行い、酒造関係者や飲食業関係者、一般社会人、主婦など計54人が修了しました。

「かごしまルネッサンスアカデミー」は、文部科学省科学技術振興

調整費「地域再生人材創出拠点の形成」プログラムとして平成18

年度に採択され、鹿児島県や県内の食品関連業界などと連携して実施してきた事業で、今年度で文部科学省からの委託事業としての5年間を終了し、来年度より新体制で開始する予定です。



第10回 探訪 かごしま



瀬戸内町・渡連海岸での運動の様子

奄美の恵み ～海洋療法を活用した健康増進～

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 国際島嶼医療学講座 嶽崎 俊郎 教授

奄美島嶼地域は豊かな自然に恵まれ、長寿者の割合が高い地域ですが、最近では生活習慣の変化とともに肥満者や生活習慣病にかかる人が増えつつあります。そのため、行政が中心となり食生活の見直しや運動習慣の普及などが行われています。海洋療法（タラソセラピー）は、奄美の恵みを活用した健康増進活動の1つとして注目されています。

海洋療法は海水や海産物、潮風、海浜など海の資源を幅広く利用する療法のことで、鹿児島県は「あまみ長寿・子宝プロジェクト」の一環として、海洋療法を活用した健康増進活動を推進しています。これと連動して、国際島嶼医療学講座では、県や市町村の委託を受け、海洋療法の効果検証を行ってきました。

与論町ではホテルのプールを活用したタラソ教室で様々な症状の軽減や血糖値の低下が認められました。和泊町では独自の施設をつくり、冬期も温海水を使って海中運動ができます。ここでは血圧や各種検査値の改善が見られた他に、脳

内の活動を示す値が安定化しました。また、奄美市につくられた同様の施設では、膝関節痛のある人を対象に検証し、関節痛の軽減、下肢筋力の増強、関節可動域の増加が認められました。温海中では、浮力のため膝への負担を軽くした上で運動できるとともに、末梢循環も改善したことによると考えられました。一方、瀬戸内町では、豊かな自然を最大限に利用し、加計呂麻島の渡連海岸で島踊りを組み合わせた運動と町スタッフによる手作りの温海水プールを使った教室を行っています。

海洋療法だけによる健康増進効果には限りがありますが、運動と組み合わせることで、運動の効果を強め、さらに楽しく続けることができるメリットがあります。今後は、当講座で行っている「あまみの生活習慣病予防と長寿に関する研究」のデータを用いて海洋療法の効果を疫学的に解析するとともに、市町村にもフィードバックしていきたいと考えています。

●保護者向け広報誌『鹿大だより』第8号を発行しました

『鹿大だより』第8号では、学部卒業者の就職・進路状況、先生インタビュー、サークル紹介、鹿大の主な出来事などをお伝えします。詳細は、http://www.kagoshima-u.ac.jp/about/kadai_dayori8.pdfをご参照ください。

●学生支援寄附金の募集のご案内

鹿児島大学では、学生支援を目的とした寄附金を募集しています。寄付は一口5,000円から。事業内容については、学生生活課(099-285-7331)までお問い合わせください。詳細はhttp://www.kagoshima-u.ac.jp/side_menu/application_form.htmlをご参照ください。

●施設の貸出のご案内

鹿児島大学では、一部の施設の貸出(有料)を行っています。利用希望の方はTEL 099-285-7111(代表)へご連絡ください。詳細は、<http://www.kagoshima-u.ac.jp/about/shisetsu.html>をご参照ください。【貸出可能施設】稲盛会館、各学部の講義室等



(表紙)

●奄美大島・渡連海岸
海洋療法が行われている場所の一つ、渡連(どれん)海岸。奄美大島本島の南に位置する加計呂麻島にあり、大島海峡に面している。本島の古仁屋港からフェリーや海上タクシーで行くことができる。アダンの木陰のある砂浜、穏やかな美しい海。豊かな自然環境は海洋療法にうってつけだ。

この窓吊り広告には、学内にいる動植物も登場し活躍しています。猫のノントはレギュラー枠を確保しておりますが、お気づきになりましたでしょうか。学内でみかけたときはお声をかけをお願いします。

広報センター長 副学長
萩野 誠

編集後記

大学キャンパス内の秋も深まってきました。銀杏の実が歩道に落ちておりますし、農場の菊の出荷も終わろうとしております。

さて、市電の窓吊り広告を始めて一年がたとうとしています。「10月の鹿大」というタイトルで、毎月大学企画の市民を対象とした催し物を紹介してきました。同窓生のみならずをはじめとして、多くの市民の方々から反響を寄せていただいております。ここで感謝申し上げます。紙面の都合がございまして、文字が小さすぎる点もござい

